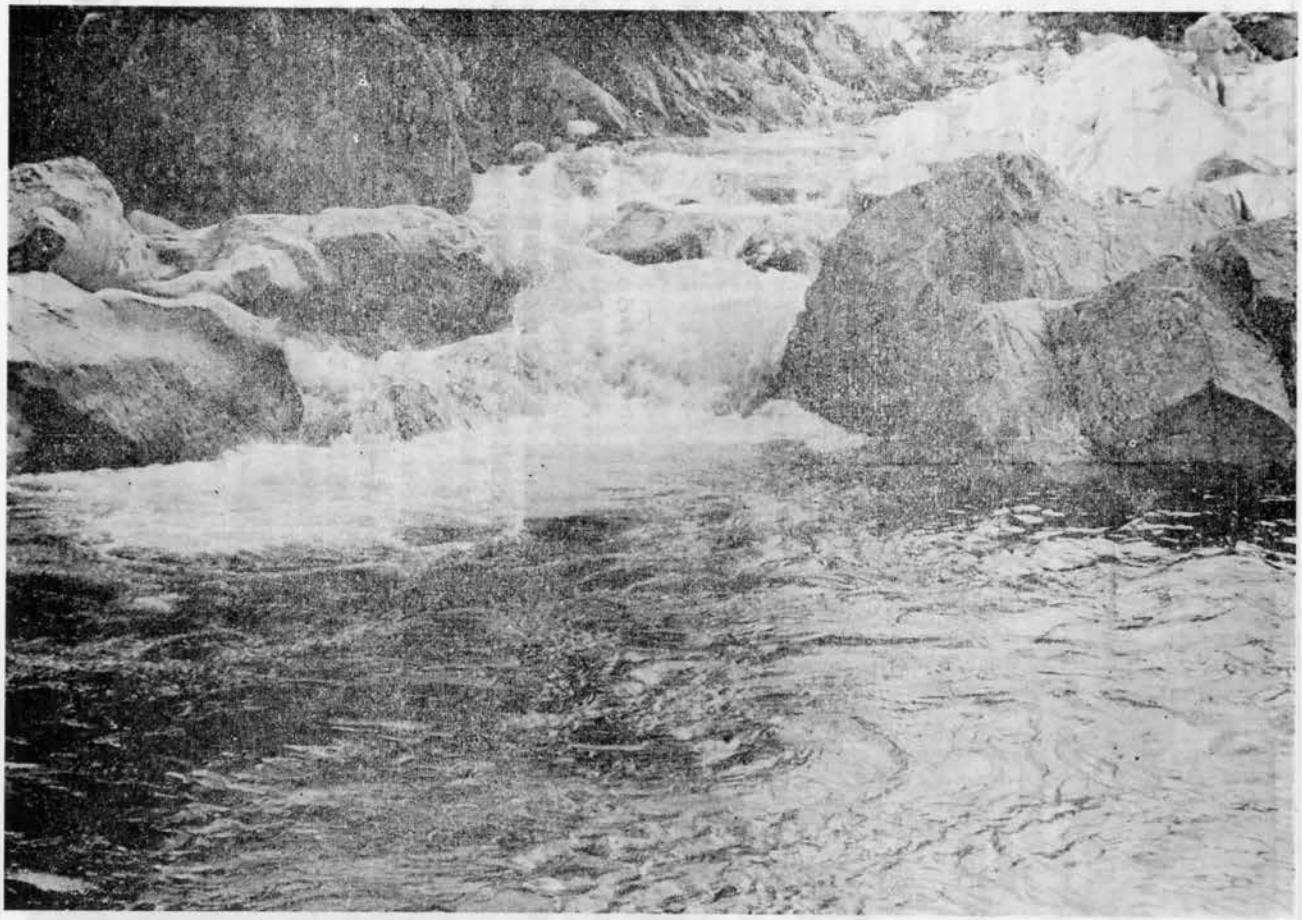
① 毎月1回 25日発行　　第3種郵便物認可(昭和35年7月26日)

山と博物館

第10巻　第8号　1965年8月25日　大町山岳博物館



文化財保護法を死文化するな

高校の先生が文化財保護法に違反した疑いで営林署から書類を検察庁におくられた。この先生は夏山の最盛期に生徒七人と一緒に北アルプスの白馬岳にのぼり小雪渓の石室の附近でキャンプしようとして生徒が、天然記念物に指定されている高山植物を、登山ナイフで三十平方メートル程刈り取った責任を問われたものだ。先生は生徒の刈り取った高山植物が天然記念物であることを知らなかったと云っている。驚いた話しだ。

天然記念物の保護地区には当然標識が立ってありこの先生も標識を見ていたという。営林署は摘発された本人たちは罪を深く悔いていると云っているが、今度の場合かつてない大きな被害であるとて今後の一般に対する戒しめとして法を適用し強い態度で臨んだ。一般に知られていなかった文化財保護法が生かされたのだ。この法は、国民の貴重な文化財を保存し文化生活の向上に役立たせ世界文化の進歩に貢献することを目的としている。

心ない登山者が法の保護を受けている高山植物を荒し制裁を受けるのは当然のことである。しかし法に基き人を罰することのみが法を生かす唯一の道ではない。

高山植物等観光資源保護対策協議会では、必要に応じて特別保護地区を設け地元の営林署が中心になり高山植物等の保護に当っているが、それ相当の予算が伴なわないため、思うような保護活動が出来ないと関係者は訴えている。国民の文化的資産を保護していくには充分な予算を伴なった行政指導が必要である。これは文化財全般の法を生かす根本的な問題であると思う。

忘れがちなことを思い起こすことは貴重な体験である。乏しい保護対策に協力していくことは法以前の常識であるとともに、敵存している法に対する義務であることを改めて認識したい。

磯村　修

遭難に思う

福島　融

こゝしばらく絶好の晴天続きで毎朝駅前から登山客を満載したバスが幾台も砂煙をあげながら山ふところ目指して登ってゆく。この分だと三千米の稜線は今日も又色とり〴〵の登山者達で大賑わいのことだろう。近年、年毎に盛況化する登山の傾向はスポーツの大衆化という面で大いに結構なことであるがその反面このスポーツは生命の危険に直結する遭難という厄介なものを内蔵しているだけに手ばなしに喜んでばかりいられないと思う。登山人口が増えれば増える程、又山岳遭難も急増している事実を関係者は直視すべきだろう

登山という行為が冒険心に根ざしている以上遭難との因果関係は宿命的とも言えるだろうが、戦後国内の山で発生している遭難事故の大半が登山以前の問題、つまり自然との対決の結果力尽きて敗退したのではなく、最早登山する資格すら疑わしい人達の引きおこす事故が余りに多すぎはしないだろうか?その最大の原因は彼等自身の登山に対する無知でありそれはよく自称山男が「俺は実力があるんだ」とか「自分は山で死ぬ筈がない」という過信とも迷信ともつかぬ考え方に発見されるマスコミが痛烈に批判を加える無謀登山、神風登山というのはおよそこういう人達の行動を指しているのだろう。そこで事故を減らし汚名を返上するためには登山者たるもの自分を知ることであり思い上りや自惚れをすて自分も又遭難予備軍の一員であることに気付いたなら、犬死的遭難は未然に防止出来る筈である。以上のような僭越なことを書いた私も予備軍の一員であるが過去の貧しい山行を通じて体験した苦い失敗例の、内二つ三つを報告して何か参考になればと思い次に記してみよう。

リーダシップ

私がリーダーを初めてやった時のことである入山時から心配されていた雨が針の木峠を眼前にして遂にやつて来た。峠についた時メンバーの女子の一人が突然明日帰りたいのでよろしくとの話(スケジュールは三泊四日)、私は一人で帰すわけにはいかぬから今こゝから丁度用事で下山する小舎の人と一諸に帰つてくれと命令したのに何と言つても聞き入れず(最早こゝでリーダーとしては落第)、その日の行動予定であるテント場の平小舎までついて来てしまった。その時点ではまだ行動を終始共にさせるよう説得出来るだろうと簡単に考えていたが、翌朝になっても彼女は自分の意志を曲げず、父親の新盆だからとの理由と針ノ木沢は以前二回程歩いているという自信を振り廻して私の止めるのも振り切り(又もこゝでリーダーシップ零)、雨の小降りになつたのを機に一人で帰つてしまつた。しかしその後が大変であつた。結極彼女はコースを大きく取り違えて南沢へ迷い込み遭難凍死寸前を通りかゝつた登山者に救助されたという一幕があり冷汗三斗の思いをしたことがある。これなど私がリーダーの資格皆無で、今は一児の母である彼女に行きあう度に自責の念にかられるのである。

遺体搬出作業(鹿島槍ニノ沢にて)

単独山行

単独山行の是非は人々によつて異なるが、特に優れた登山者以外は奨められない。しかし山行の過程の一時期にたまらなく単独行に魅力を感じる時がある。私も御多聞にもれず文太郎(有名な単独行者、故加藤文太郎氏)気取りで気まゝに一人山旅を楽しんだが、初秋の後立山を縦走した際スバリ岳の下りで誤つて転倒し右手首に思わぬ裂傷を負い仲々止血出来ず左手と口でようやく手当をし、事なきを得たという苦い経験を持っている。これはもし天候の激変や貧血で倒れたと仮定したならば仲間がないため致命的な結果を招いていたゞろうと思うと慄然とする。それ以来私は単独行をタブーとして山行にのぞみ苦しみや喜びを分ち合う組織的な登山にこそ、その意義を見い出している。

無謀登山

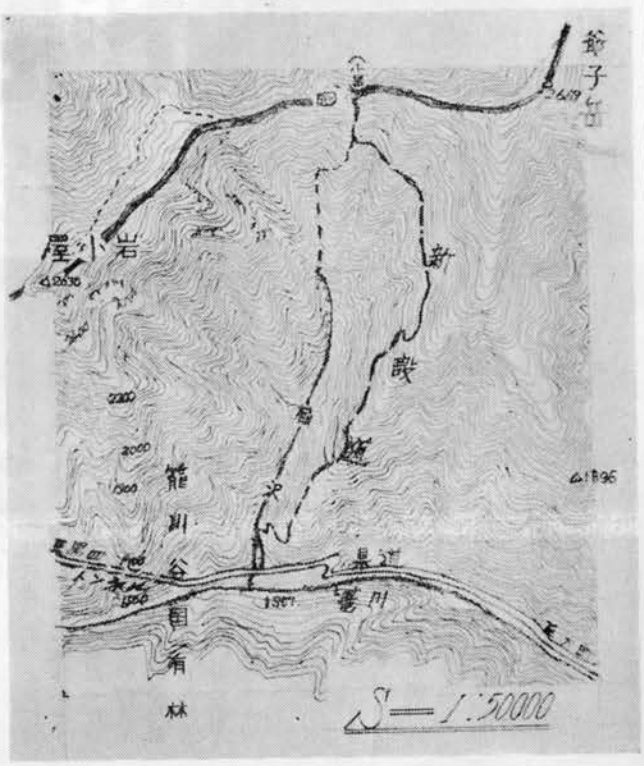
伊勢湾台風の時だった。我々のパーティーは台風の接近を知りつゝも最早弦を離れた矢のように上高地から横尾谷を過ぎてどしゃ降りの中を強引に涸沢へと向った。途中誰かゞそれとなく行動の中止を奨めたがこゝ迄の経過における出費と休暇のやり繰りなどが無効になることを恐れてか大勢はその声を吹き消してしまった(リーダーシップ零)。夕闇せまる涸沢へたどりつき風雨の中をようやくテントを設営、シラフに入る頃から風雨は一段と強くなり、夜中には支柱を交代で支えていなければならなかった。

翌朝はます〳〵荒れて暴風雨と化しラジオが名古屋地方に台風の上陸を伝えた午后三時頃にはその極に達し北穂沢はあふれて眼前に滝となってせまり、こぶし大の石は舞い、四つのテントの内二つ迄吹き倒されてしまった。最後は涸沢小舎へ逃げる算段をしたがその頃になってようやく台風も下火になり、人心地を得た。二晩にわたる疲労から一名は初期の肺炎の疑いが濃くなったのでスケジュールを繰り上げ早々に穂高を後にした。

以上の三例は極く普通に起るミスだが、一歩間違えば取り返しのつかない結果を招くことを心していたゞきたい。遭難事故を起してからでは最早どんな言い訳も一切きかないしそれに第一登山が命と引き替える程価値あるものではあるまい。

….道新岳ヶ爺….

西沢 要



後立山連峯の一つ爺ヶ岳(二、六六九米)に今シーズンから開放された新ルートを紹介しよう。この爺ヶ岳は、美しい双耳峯を画く鹿島槍ヶ岳の南方に位し、大町市立山岳博物館の雷鳥調査等で全国に名を馳せた山である。この山への今迄の登山路は扇沢の河原づたいの路で雨の降るたびに流失し登山者の足をうばったものだ。そこで、長野県と大町市とそして種池小舎の主人、柏原氏との三者の協力によってこの新しいルートが開拓されたのである。

さて、観光客でにぎわう黒四ダムへの大町ルートを扇沢で別れ、今迄のとりつき点であった右岸と反対に左岸のナラ林に入れば新しいルートのとりつき点を見ることが出来る。巾員一米の道は登山路にはむしろぜいたくな感さえ抱かせる。扇沢の流れと別れて二十分も歩けば尾根筋に出る。

初夏の頃はシャクナゲが咲き乱れ吹き上げる沢風もひときわさわやかである。さわらの林の道を右に大町市街地を遠望し、左に針の木岳の雪渓をみながら歩を運べばやがて市街の遠望とも別れ、尾根の中腹を深い谷川の音をきゝ木の間がくれに残雪の岩小屋沢岳の姿が見えて来ると高度もぐんぐんかせいでくる。そして肩の荷物が次第に重く感じられて来る頃には爺ヶ岳の緑の稜線に種池小屋の赤い屋根が見えて来る。原始林をぬけて振り返えれば、針の木岳の雪渓が夏空にせり上がって水筒の水も残り少なくなり、爺ヶ岳の南峯の稜線がゆるくせまってくると種池小屋はもう指呼の間である。扇沢の取付点から、種池小屋まで四・八K わずか三時間余りのゆるいのぼりで、黒部の谷の向うに剣岳の岩肌をみる種池小屋に到着する。このルートは中途、水場のないのが少し苦しいが、安全な登山が叫ばれている昨今の山にふさわしい登山路といえるであろう。

オオヨシキリの巣立ち

長沢 修介

すっかり鳴き声をしづめてしまったオオヨシキリに代って、ヨシ原といくらか乾燥した草原との間を往復しながら、オオヨシキリよりは低いが、それよりはもっと激しく鳴いているのはコヨシキリだ。

昨年に続いてコヨシキリの蕃殖を見ようとやって来たが、この草原には夏の太陽をさえぎるものが何もなく、ただでさえ暑いのに重い望遠レンズのついたカメラをかまえて、身動き一つ出来ず立っている態は、人が見たらこの暑さの中に何と馬鹿なことだろうと思うが、当の本人にしてみれば顔から、胸、背中を滝のように流れる汗を拭いもせず、目だけぎょろつかせて鳥の近寄ってくれるのを心待ちに必死の苦闘である。

しかしもう二時間もたつのに一向にコヨシキリは巣の場所を教えてもくれず、近寄ってもくれない。草いきれと暑さで目まいさえ覚えついに精根つきてヨシ原にもぐり込んで冷い湧水で顔を洗い喉をうるおす。

一息ついて辺りのオオヨシキリの警戒声に気付いた。あの張りのある声ではなくギリ、ギャーと今にも血でも吐き出しそうな、声帯のつぶれた声である。姿はとみると、これもヨシの葉ですれて羽もすっかり白ちゃけて尾羽もぼろぼろ、あの姿で良く飛べるものだと思う位のあわれな姿である。ヒナを育てるためにすっかり体をすりへらしてしまった見るも哀れな親鳥の姿である。

その側に親とは対称的に丸々と太ったヒナが大空という自由の世界を始めてみるかのように、きょろきょろとあちこちを見廻していたその姿がいかにも子供のようで可愛らしく、そっとカメラをかまえて近付いても、生れて始めて見る人間に恐がりもせず、大きな目を見開いて、じっと見据えていた。

その態があまりに童のそれに似ていぢらしく、親の悲しそうな声をよそに立ち去ることを忘れさせてその姿に見ほれていた。

オオヨシキリのヒナ

山の詩歌碑

福沢武一

虚子句碑

茅野市北山滝湯手前

長野県の高浜虚子関係碑は六基。年代の順にあげる。いずれも虚子自筆。筆致はいささか渋滞しており、それが一種の風韻を生んでいる。六基に共通すろ特徴だ。

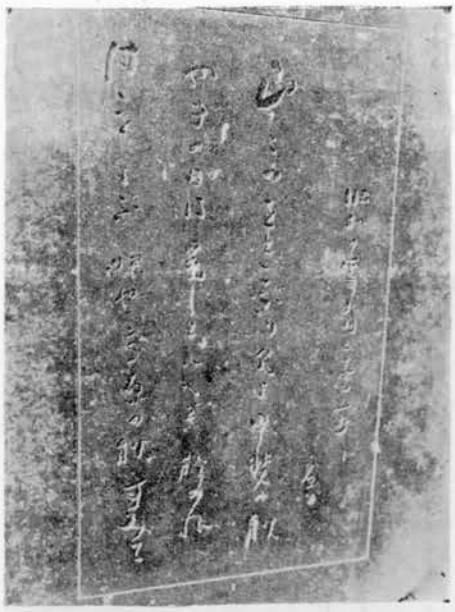
①更級や姨捨山の月ぞこれ（冠着山頂）昭和三十二年

出びたいの碑面を磨いて一句がしたためられている。本来の姨捨山はこっちなんだと、高い山頂におっ建てた。宣伝臭たっぷり。句もまた味気ない。

②秋晴や八ヶ岳を見浅間を見（臼田町稲荷山公園）昭和三十一年

③秋晴の浅間仰ぎて主客あり（小諸高校下、虚子疏開地）同年

④立科に春の雲今うごき居り（小諸市八幡神社）昭和二十二年



戦時中、一年半の小諸疎開がこの三碑を生んだ。四周の山々が詠ぜられて印象的だ。

⑤大粒の雨となりけりほととぎす（池田町大峯中腹）昭和二十四年

植林の記念碑として空穂、麓両氏の歌と並刻された大碑。碑も、歌句も凡。

⑥最後に、一番古い虚子句碑は北山の蓼科高原。台地をせり上って、山地の中腹に当るところ。滝湯へ横道がくだっていく三辻に東面して立っている。碑文は、

昭和十四年九月二十四日一遊　虚子

山々の男ぶりみよ甲斐の秋

山の日は暑しといへど秋の風

母を呼ぶ娘や高原の秋すみて

全体が四行に彫まれ、わくどりの中に納められている。とぎすまされた黒石。高さは二メーターを、幅は一メーターを越える。一メーター程の台座上にすえられている。こけおどしのうらみがないではない。碑面がのっぺらぼうで、形も趣きに欠ける。

諏訪はアララギの温床であった。と共に、子規派の俳句も育っていた。諏訪全体がそうだったように、ここ山浦地方も同様だった。俳句では両角竹舟郎を先頭に、多くの作者が明治、大正、昭和の三代にわたって活潑な動きをみせた。そうした同志が相寄って子規門の元老虚子の碑を建てたことは極めて自然なことだった。

建碑当時の様子を白湖氏の一文にうかがうと、――

「昭和一四年九月二三、二四の両日にわたって高浜虚子、高浜年尾、高安風生、山口青邨、池内たけし其他著名なるホトトギス同人が二四名の一行で蓼科高原に吟行に来て、地元の信濃ホトトギス会の両角竹舟郎、常田残雪、手塚杜美王、藤森雪渓、木村蕪域、両角福、小口白湖等二三名と合同の俳句大会を開催したことは、今日において考えても空前絶後のことで、……会場は新築最中の滝湯温泉であった。虚子の来杖を記念して翌一五年一〇月に滝湯入口の辻の所に巨大な虚子句碑が建立された。竹舟郎の奔走によるもので…」（雑誌「諏訪」第五号）。碑陰に刻まれるところは、――発起者北山同人。後援者、矢崎哲夫、信濃ホトトギス会。…地元北山の同人の意であること、いうまでもない。

碑の前に立つ。ここはちょうど道限であるために広大な眺めをほしいままにできない。一級の高原なのに惜しい。夏ともなると、ひどい土埃をかぶった碑が灰色になっている。

ここはどうも碑のためには最適の地点ではないようだ。

これを要するに、虚子の句碑数は多い。けれど、良碑には恵まれない。臼田町の句碑を第一に推したい。すがすがしさの故に。次善のものとして蓼科の碑がとり上げられる。さて小諸八幡神社のそれとどっちを先にすべきだろうか？……それ以外はいうに足らない。とるに足らない。

博物館だより

◇「日本の野性動物記」写真展開催

去る八月十五日より八月三十一日まで、山岳博物館講堂にて、富士フィルムKK後援により田中光常氏の作品を展示しております。

これは三十八年「朝日カメラ」に日本野性動物記として連載されたもので、ハクビシン（ジャコウネコ科）、ナキウサギ、ニホンジカ他三十数点で、日本の特異な野生動物の生態をカラー写真におさめたものです。

◇カモシカ展示コーナー新設

去る七月、東京新宿ステーション、ビルとの協賛で夏山の写真展を同ステーション、ビル内に開催し、山博もカモシカ、ライチョウの剝製、動植物の写真など十数点出品したがその礼として、この程見積金額三万円のウオルケース一個を送ってきた。

展示用具が少ないと歎いていた矢先なのでいただくことにして、早速特別天然記念物カモシカの展示にあてることにした。

◇裏山の池にニジマス放す

好天続きで山博専用の簡易水道もこのところ、水の出が細くなってきたので、防火用水池にとブルで堀りとった池予定地に、水漏れを防ぐため緊急客土をほどこし、水を張って火災に備えることにした。

しかし、やぶ蚊の発生源になってはたまらないので、ニジマスを放養したが、水温が低いので元気に成育して、防火、観賞、清涼の〃一石三鳥〃となっている。

お願い　「山と博物館」の購読者をつのっております。年間三〇〇円（送料共）大町山岳博物館宛お送り下さい。

表紙説明

針ノ木谷南沢

撮影　高橋秀男

山と博物館　第10巻第8号
一九六五年八月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL（大町）二一一
大町山岳博物館
印刷所　大町市下仲町
大糸タイムス印刷部